博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　南潤珍

学位申請者　　黒島規史

論　文　名　　定形性の観点から見た現代朝鮮語の副詞節

【審査結果】

黒島規史氏より提出された博士学位請求論文「定形性の観点から見た現代朝鮮語の副詞節」について，審査委員会は論文を精査し，最終試験を行なった。その結果，審査委員会は本論文が本学大学院の学位授与の基準を十分に満たした優れた論文であると判断し，全員一致で黒島規史氏に博士（学術）を授与することが適当であると判断した。

審査委員会は南を主査とし，本学の趙義成准教授（主任指導教員），風間伸次郎教授（副指導教員），五十嵐孔一教授，学外から生越直樹教授（東京大学）あわせて 4 名の副査をもって構成し，最終試験は 2020 年 2 月 15 日に公開で実施された。

【論文の概要】

本論文は，現代朝鮮語において主に副詞的な修飾機能を担う用言の屈折形すなわち「副動詞」を対象とし，各副動詞間の関係を定形性(finiteness)の観点から明らかにすることを目的とする研究である。

論文の構成は「第 1 章 序論」「第 2 章 副詞節と他の文法要素との連続性」「第 3 章 副動詞と用言の語彙的特性」「第 4 章 「副動詞＋焦点助詞」の形態，統語，意味」「第 5 章 「副動詞＋TAM」の形態，統語，意味」「第 6 章 副詞節の主節用法」「第 7 章 結論」となっている。

第 1 章では本研究の目的と研究対象について述べられている。朝鮮語の副詞節のこれまでの研究では，それぞれの副動詞の意味や統語的特徴の詳細な記述は蓄積があったものの，各副動詞間の関係を記述した研究は少なかったと指摘した。そして副動詞間の関係を明らかにするために①副動詞接辞と結合する用言の特徴，②副動詞に焦点助詞が後接したときの統語・意味的特徴，③副動詞がテンス・アスペクト・ムード(TAM)マーカーと結合したときの文法的制約，④副詞節の主節用法の問題を設定し，副詞節の定形性(finiteness)の観点を導入している。副詞節の定形性については，「定形性は文

らしさの形態統語的指標として定義される」とした Bisang(2007)や動詞の屈折によって表される定形性の特徴を提示した Givon(1990)などを参照し，「節の述語にマークされる文法的要素の多寡によって決まる」と定義した。この定義に基づき，本研究で対象とする 11 個の副動詞接辞(-key$_1$，-(a/e)se$_1$，-myense$_1$，-(a/e)se$_1$，-key$_2$，-ko，-myense$_2$，-nikka$_1$，-taka，-teni，-(a/e)to，-myense$_3$，-(a/e)se$_3$，-myen，-nikka$_2$，-ciman，-nuntey/-ntey)について，結合する文法要素によって副詞節の定形性を調査・分類した。第 2 章以降はこの副詞節の定形性を基準に展開される。

第 2 章では，朝鮮語の副動詞間の関係に対する本格的な考察に入る前に，副動詞形と他の文法要素との連続性を概観し，研究の対象を限定している。副動詞形と連続性のあるものとしては，複合動詞の前部要素，補助用言を導く迂言的形式の一部，助詞(への文法化)，補文マーカー，副詞(への語彙化)などが挙げられる。これらは 3 章以降の論議の対象とはしないが，副動詞形の定形性の観点から説明することができるとし，複合動詞の前部要素のように従属度が高い場合から副詞のように従属度が低い場合まで分布することを明らかにしている。3 章から 6 章までの研究対象としない事例も従属度の観点から整理することで，朝鮮語の副動詞の多様な機能を一貫した観点から概観することができるとしている。

第 3 章では，副動詞接辞と結合する用言に焦点を当てて，副動詞接辞と用言の結合の可否，用言の語彙的性質と副動詞の意味の関連性について考察している。調査の結果，定形性の度合いの低い副詞節は形容詞と指定詞との結合に制限が見られ，逆に定形性の度合いの高い副詞節も制限が見られないことを明らかにした。そして様態・目的を表す副動詞接辞-key は動作性用言と結合するか状態性用言と結合するかによってその意味や統語的特徴が左右されること，同時を表す副動詞接辞-myense と中断を表す-taka の意味は結合する動詞のアスペクト的特徴と関連すること，継起を表す-ko，-(a/e)se と結合しやすい動詞とその意味は動詞の他動性(transitivity)と関連することを明らかにしている。

第 4 章では，副動詞に主題，対照の=nun/=un や添加の=to などの焦点助詞が後接する場合に，どのような結合の組み合わせが可能かを 15 個の焦点助詞を対象にコーパス調査を行い，定形性の度合いが高い副詞節は焦点助詞との結合において制限が見られることを明らかにしている。また，焦点助詞が付くことによって副動詞の意味がどのように制限されるのかについて記述し，時間的関係を表す副動詞に焦点助詞が後接し条件/逆条件を表すのは，節の間に因果関係があると解析されることによるものであると論じている。

第 5 章では，副動詞にアスペクト，テンス，ムード(TAM)マーカーが結合する際の副動詞の統語，意味的特徴と共に TAM マーカーの意味の制限のされ方について考察して

いる。進行アスペクトの-ko iss-は定形性の度合いが低い時間関係を表す副動詞以外は比較的自由に結合すると述べている。テンスに関しては副詞節内の過去接辞が主節を基準時とした相対テンスとして解釈されるか発話時を基準とした絶対テンスとして解釈されるかを論じ，定形性の高い節であれば絶対テンスとして解釈される傾向があることを示している。ムードに関しては，ムードの意味がどのように制限されるかに加えて，ムードの認識主体がどのように左右されるかを考察している。その結果，「～ようだ，～と思う」を表す[ADN kes kath-]は副動詞との結合に比較的制限がないことに対し，蓋然性を表す-keyss-と推量を表す-l kes=i-はその意味に制限があることが明らかになった。また，-keyss-と-l kes=i-は定定形性の低い副詞節と結合した場合，ムードの認識主体は 2 人称主体となりやすいことを指摘し，定形性の度合いの高い副詞節ほど主節の発話内効力(illocutionary force)の影響を受けずに認識主体が聞き手ではなく話し手となる傾向があることを論じている。

第 6 章で本来副詞的に働く節が，主節として現れる従属節の主節化(subordination)に関して，節の定形性と主節としての現れやすさについて論じている。テンスを表す形式と丁寧さを表す形式との結合可能性に注目し，もともと副詞節としての定形性の度合いが高い場合，あまり意味の変化を伴わずに主節として用いられ，過去接辞や丁寧さの形式との結合も任意であることを示している。

第 7 章では，これまでの内容を要約し，第 3 章から第 6 章までの考察で明らかになった副詞節の定形性に関連する現象をまとめ，定形性の低い節ほど結合する用言の影響を受けやすく，焦点助詞も結合しやすい，また TAM マーカーは結合しないか何らかの制限を受け，主節としても現れにくいことを指摘している。

そして残された問題として①各章で取り上げた問題のつながり，例えば焦点助詞と TAM マーカーの相互承接の問題を明らかにする必要がある，②副詞節の定形性という基準だけでは説明しきれない現象に対応するため，意味の観点を加えることが求められる，③節連結の問題，すなわち副詞節と主節や上位節との関連性を明らかにする必要がある④ここで取り上げなかった副動詞接辞も含めた，より包括的な考察が必要であるなどを指摘している。

最後に本研究の意義として言語類型に近似性が見られる「アルタイ型」言語の研究への応用可能性を挙げることで論議を締めくくっている。

【論文および最終試験の結果】

審査は冒頭に審査委員の紹介，主査による進行の説明があり，続いて黒島氏から論文概要説明が約 20 分行われた。それに引き続き，各審査員と黒島氏の間で活発な質疑

応答が行われた。約 120 分の公開審査の後，審査委員会で最終審議を行い，上記のごとく判断した。

本論文は以下の点において非常に肯定的な評価を得た。

(1) 朝鮮語の副動詞に関しては，術語や分析方法はそれぞれ異なるものの，各々の副動詞接辞の結合関係・意味機能を記述する研究がほとんどである。このような状況の中，本研究では「定形性」という観点から副動詞間の関係を記述している。複数の副動詞間の関連性や副詞節の性格を一貫した観点に基づき明確な方法論で論考が進められており，論旨がきわめて明瞭である。

(2) 朝鮮語の副動詞・副詞節に関する研究のみならず，日本語学や類型論の研究を積極的かつ網羅的に参照し，通言語的な問題意識のもとで論旨を展開している。世界の 1 言語として朝鮮語の特徴を体系的に記述しており，今後の朝鮮語の副詞節研究の方向性に示唆を与える面が多い。

(3) 論述に際してはコーパスから得た実例が示されているが，すべての用例にグロスが付けられており形式面で完成度が高い。内容面においても，あげられる用例は論旨との関係で過不足がなく，説明もわかりやすい。論旨が説得的であるのはそのことにもよると思われる。

このように評価される点がある一方で，以下のような課題も指摘された。

(1) 本研究では，2 つ以上の意味機能を持つ副動詞を同形語と見做し，同形語の中「継起」など副詞的な意味機能を持つものは考察対象としているが，「並列」のような意味機能を持つものに対しては従属性がなく，副詞節とは言い難いとし対象から除いている。このようなやり方は，本研究が副詞節に焦点を当てたものであるからと理解はできるが，定形性の観点から考えると残念に思われるところもある。副詞節である副動詞節とそうでない副動詞節を定形性の観点から考察することでより副詞節の定形性が明らかになる可能性がある。

(2) ロシアの言語論や朝鮮人民民主共和国で行われた朝鮮語文法研究には，早い時期から，本研究の「定形性」とも通じると解釈される記述がなされているが，本研究に十分に反映されているとは言い切れない。

(3) 焦点助詞との結合関係を調査し，副動詞の定形性の度合いとの関連性および意味関係を説明しているが，①焦点助詞という術語は妥当なのか②各々の焦点助詞を個別に取り上げているが，焦点助詞間の連続性をとらえ，グルーピングしたうえで副動詞との結合関係を調査するとより明確な傾向が見えてくるのではないか③コーパスの出

現頻度をそのまま結合関係の判定に用いているが，焦点助詞の頻度の差によるバイアスを回避するための統計学的手法を適用するべきではないか。との指摘があった。

(4) 焦点助詞と格助詞の区分は明確なのか，絶対テンスと相対テンスの判断は妥当なのか，主節化した節の定形性判断の基準としてテンスと丁寧さを用いることは朝鮮語の実情に合っているものかなどの指摘があったことから分かるように，より踏み入った論旨の展開が必要な部分がある。

以上の質問や指摘は本論文の学術的な価値を損なうものではなく，むしろ今後のさらなる研究の発展のための激励や助言と捉えられるものであった。審査員からの問いかけやコメントに対し，黒島氏からは問題点をよく自覚した上で，的確な応答や解釈，また将来に向けた課題として受け止める旨の表明がなされた。指摘された課題を真摯に受け止め，今後の研究に反映させていく姿勢もうかがえ，研究者として今後の発展と活躍が期待された。

このような最終試験を経て，審査委員は上述の問題点を踏まえた上でなお，本論文が学術的に優れた論文であるということに意見が一致した。よって，審査委員会は全員一致で黒島氏に博士（学術）を授与することが適当であるという結論に至った。